

課題指向型の作業に取り組むことによる  
アウェアネスの変化過程  
—就労を目指す高次脳機能障害を有する者を対象とした  
複線経路等至性アプローチ (TEA) による分析—

リハビリテーション科学研究科 作業療法学分野 作業療法開発学領域  
09D007 鈴木達也

要旨

【研究の背景と目的】

高次脳機能障害の特徴として気づき (awareness : アウェアネス) の障害がある (山鳥, 2007). 自己の能力に適度な認識が得られなければ, 必要な援助, 助言, 支援を受け入れることが難しくなる. 本研究は高次脳機能障害を有しながら就労支援施設を利用している者を対象に課題指向型のプログラム実施後のインタビューからアウェアネスの変化過程を質的研究法である複線経路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach, 以下: TEA) (サトウ 2006) TEA を用いてそのプロセスを明らかにすることを目的に実施した.

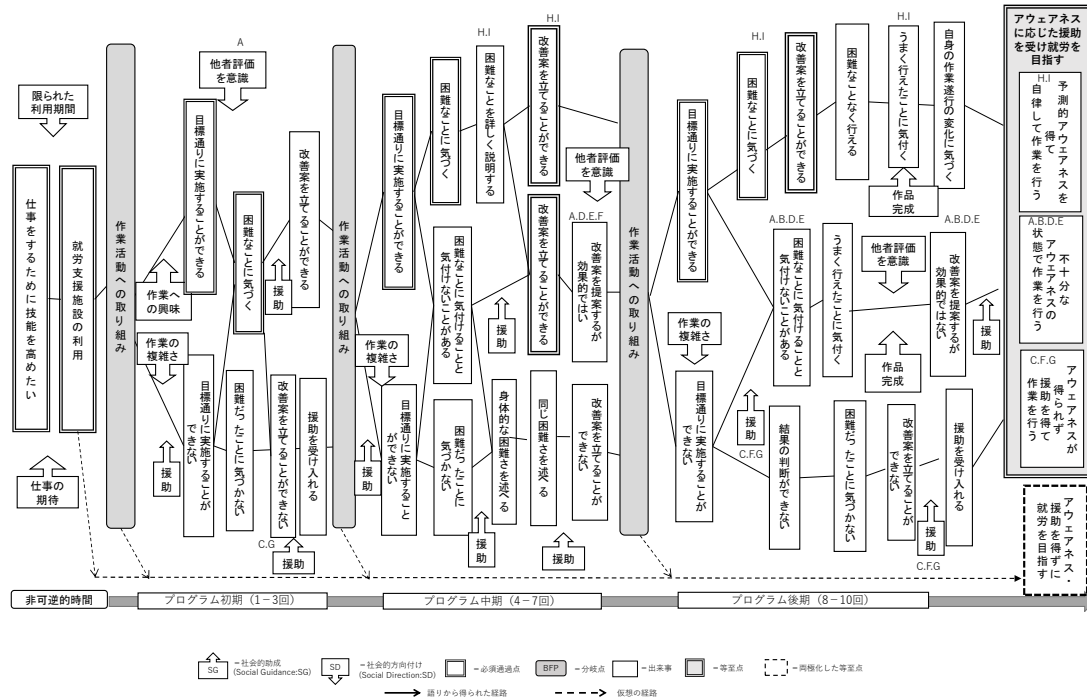
【研究の対象と方法】

本研究の対象は高次脳機能障害と診断されており就労を目的としたサービスを利用している者で研究参加に同意が得られた者とした. 研究参加者に関連する課題指向型の作業を中心としたプログラムを 10 回実施し, 毎回のプログラム終了後にインタビューガイドを用いて作業の振り返りを中心に聴取した. 聴取したデータは逐語録化し, 時間経過を含めて分析できる質的研究法である TEA を分析方法として用いた. また量的データについてもアウェアネスの変化のプロセスの参考とするためプログラムの事前事後で評価した. 評価項目は COPM (Canadian Occupational Performance Measure), AMPS (Assessment of Motor and Process Skill: 運動技能とプロセス技能評価), ACQ-OP (Assessment of Compared Qualities Occupational Performance : 作業遂行の質の比較評価), MoCA-J (Montreal Cognitive Assessment), GSES (General Self-Efficacy Scale: 一般性セルフエフィカシー尺度), EQ-5D-5L を実施した.

【結果】

最終的な研究協力者は 9 名 (男性 6 名, 女性 3 名, 平均 40.4 歳). 発症からの経過は平均 4.6 年であった. 本研究に参加した 9 名の参加者のすべての逐語録を荒川ら (2013) の TEA を用いた分析法に沿って統合的な TEA を描き, アウェアネスの変化のプロセスを描いた (図: 全体の TEA). 横軸は非可逆的な時間経過を示し, プログラム全体を 1-3 回目の初期, プログラム 4-7 回目の中期, そしてプログラム 8-10 回目の後期の三期に分類した. 本研究の TEA ではすべての協力者が就労支援施設を利用中であることから, 必須通過点 (OPP) として【仕事をするために技能を高めたい】, 【就労支援施設の利用】とした. 前期, 中期, 後期のそれ

それぞれで分岐点 (BFP) を【作業活動への取り組み】とした。最終的な等至点 (EBP) として【アウェアネスに応じた援助を受け就労を目指す】が描かれた。等至点の中には対象者のアウェアネスとプログラム中の援助の頻度に応じて、【予測的アウェアネスを得て自律して作業を行う】、【不十分なアウェアネスの状態で作業を行う】、【アウェアネスが得られず援助を得て作業を行う】の3つの等至点が含まれた。また、事前事後の量的データの比較では EQ-5D-5L の事前の自己評価と他者評価に有意差 (Mann-Whitney U  $p < 0.05$ ) があったが、事後評価には有意差はみられなくなり、自己評価と他者評価の差異に減少がみられた。



図：対象者9名の統合的 TEA 図

### 【結論】

本研究は高次脳機能障害を有しながら就労支援施設を利用してしている者に課題指向型の作業を行うことでアウェアネスの変化過程について質的研究法である TEA を用いて分析した。対象者は3つのアウェアネスの状態が含まれた等至点『アウェアネスに応じた援助を受け就労を目指す』EBP) に至ることが明らかになった。その中でも【アウェアネスが得られて自律して作業を行える】者は、課題そのものへの関心の強さや、プログラム中の失敗や成功に関する経験を保持し、次回のプログラム時に反映することができていた。Crosson (1989) は3ステップのアウェアネスの段階はステップアップをイメージできるが、人によってはその段階が変えられない者もいると述べている。本研究では疾患や症状、発症からの経過年数については異なる背景を有したものが研究に参加したため、本研究の結果を一般化することは困難である。しかし高次脳機能障害のアウェアネスに対する確かなアプローチはまだ理論化されていない。本研究で描かれたプロセスを元に対象者のアウェアネスの階層を参考にすることでより良い支援を行うことへの一助になるのではないかと考えられた。